

## 転機を迎えるグローバリズム

株式会社格付投資情報センター 取締役専務執行役員  
藤 森 克 己



これまで主にジャーナリストの立場から40年にわたり国際金融・資本市場とそのプレーヤーたちをウォッチしてきた。3回の米英駐在も踏まえて振り返ってみると、この間に米国が主導した経済・マーケットのグローバル化は急速に進展し、そこに絡む金融機関の興亡もドラマチックなものがあった。しかし、この10年ほどリーマン・ショックや米中対立などもあり、世界における米国の主導的地位は揺らいでいる。様々なドラマを生んできた米国発のグローバリズムは果たして後退に向かうのか、それとも一時的な停滞現象なのか、きわめて興味深い。

筆者が初めてニューヨークに赴任したのは1983年のことだ。当時はロナルド・レーガンが大統領に就任し、規制緩和や大型減税を柱としたいわゆるレーガノミクスを開始した直後だった。あとから振り返れば新自由主義と称され、その後の40年間世界をリードする新しい経済の枠組みのスタートを目の当たりにしていたわけである。

このころウォール街を席卷していたのは、それまでの伝統的な投資銀行と一線を画したソロモン・ブラザーズだった。ソロモンは資本力をテコに米国債の大量売買で圧倒的な強みを誇った。先物やオプション取引なども絡めて取引をリードし、ビジネス・ウィーク誌は同社のことを「ウォール街の王様」と評した。

ウォール街の華やかな動きの裏で米国経済はいろいろな問題を抱えて